

「なぜ、週3日の訪問教育だ
けなのか…。不公平だなんて思
います」

岡山県立倉敷まきび支援学
校(倉敷市真備町箭田)高等
部3年齋藤卓麻さん(18)の母・
淳美さん(40)は不満を隠さな
い。

卓麻さんは生後8カ月で重度
のせんそく発作から低酸素脳症
となり、重い障害が残った。当
初は特別支援学校に通えたが、
小学3年で人工呼吸器を着けて
から訪問教育に。週3日2時間
ずつ教師が自宅を訪れ、このう
ち1日は、自宅でなく学校で他
の生徒と授業を受けることが認
められている。

訪問教育は教師と一対一の関
係。教材などで工夫はしてくれ
るが、「先生との会話だけで刺
激が少ない」と淳美さん。学校
だと美術で陶芸をしたり、音楽
で太鼓をたたいたり活動が
幅広い。「のびるを回す音を聞
き、粘土の感触を楽しむなど一
つ一つが大切な体験。みんなと
ガヤガヤ食事するだけでもい
い」

重さ十数キロあった呼吸器のパ
ツテリーが電話の子機ほどの大
きさになるなど外出しやすい環
境は整ってきた。それでも「通
学の壁は厚い」といつ。

一緒に学びたい… 医療的ケアの壁

④ ずれ

障害のある子を対象とした特
別支援学校には看護師が多く配
置されているが、こうした学校
でさえ医療的ケアに関する制限
は多い。

例えば、岡山県内では人工呼
吸器を装着した子どもは原則通
えない。着けていない子どもで
も、たんを吸引できる範囲に限
られ、より奥までケアするのは
困難だ。胃ろうなどの「経管栄
養」も学校の看護師へ引き継ぐ



齋藤卓麻さんと母の淳美さん。人工呼吸器を
着けてからは原則週3日の訪問教育しか認め
られていない

ニーズ急増 態勢追いつかず

までの数カ月間、保護者が付き
添いを求められることが多い。
「実際の生命へのリスクとい
うより、医療的ケアの多さが通
学の判断基準になっているよう
に思う」

子どもを訪問診療する「つば
さクリニック岡山」(岡山市北
区奉還町)の中川ふみ医師(37)
は医療と学校の認識の差を
指摘する。呼吸機能に問題があ
っても呼吸器を着けていなか
れば通学が認められるケースもあ
り、「呼吸器がある方が安全な
はずなのに」と言う。

保護者から聞く学校の対応に
疑問を感じることも少なくない。
血中酸素濃度が少しでも普
段と違ったら、子どもが元氣そ
うでも保護者に電話してくる。
食べ物を口から出しただけで、
体調が良くても、嘔吐として早
退になる…。

中川医師には、過剰とも思え
るこうした対応が、医療的ケア
が必要な子の急増に対して態勢
が追いついていない学校現場の
戸惑いや不安の裏返しとも映
る。

岡山県内の特別支援学校で日
常的に医療的ケアが必要な児童
生徒は6月末で85人。2008

年の45人からほぼ倍増してい
る。最多の早島支援学校(早島
町)では12人から40人と3倍以
上だ。

これに対し、看護師は03年度
から配置され、現在7校で33人
いずれも勤務時間が3〜6時間
のパートだ。近年の看護師不足
もあって確保が難しく、関係者
からは「看護師の経験やスキル
の面でばらつきがある」と、ニ
ーズとの「ずれ」を指摘する声
も聞かれる。

特別支援学校で求められる医
療的ケアの内容は、障害に応じ
ても多様だ。個別の保護者の要望
にも応えねばならない。「今の
処遇で看護師に新たな負担をか
けて辞められると困る」と、あ
る学校の関係者。鳥取県の特別
支援学校では昨年、看護師が一
斉辞職し、医療的ケアが必要な
児童生徒が一時、登校できなく
なる事態が起きた。

「医療が欠かせない重度の障
害の子は今後も増える」と認識し
ている」と早島支援学校の高橋
章二校長。岡山県教委特別支援
教育課は「人工呼吸器を着けた
子どもの通学など現状で容認し
ていない事例も、子どもの状態
に応じてケースバイケースで認
めるよう検討していきたい」と
している。(阿部光希)

山口

岡山芸術交流2016「」が出席した。

このま

このま

このま

このま

このま

このま

第2199回西日本宝くじ
=幸運の女神くじ
(23日・みずほ支店
銀行福岡支店)

第4498回ナンバースクジ
数字選択式全国自治宝くじ
(23日・東京宝くじドリーム館)
<ナンバースクジ>

第179回ロト7抽せん結果
数字選択式全国自治宝くじ
(23日・東京宝くじドリーム館)
◇本数字

【詐欺